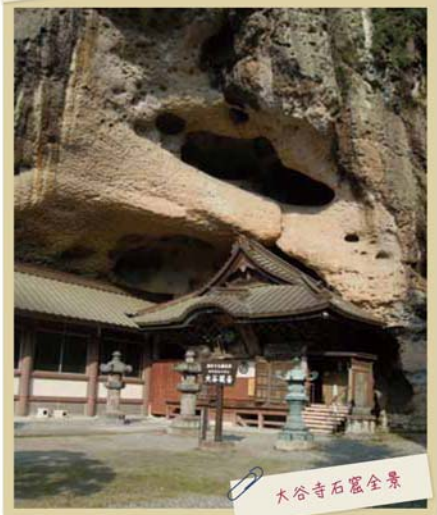


日本最古の磨崖仏 天平の香漂う大谷観音

宇都宮伝統文化連絡協議会長 柏村 祐司



大谷観音「千手観音菩薩立像」



大谷寺石窟全景

大谷寺のご本尊を、大谷観音という。ところが大谷公園内にある平和観音を大谷観音と勘違いしている者がいるという。とんでもない話で、大谷観音は、大谷寺の岩窟に掘られた千手観音菩薩立像である。千二百年以上も前に石心塑像という独特の技法で作られ、造形美にも優れたものであるところから、国の重要文化財に指定されている大変立派な仏様である。

大谷観音のような洞穴の岩窟に掘られた仏像を磨崖仏という。はるかインドのアジャンタやエローラの石窟寺院に起源を持ち、仏教東漸に伴いインドからアファガニスタンのパミール、中国の敦煌莫高窟等を経てはるばるもたらされた。大谷寺の磨崖仏は、仏教が行き着いた東の端に見事に花開いたものである。

大谷観音は、西に向けた岩窟の中央部に彫られている。像高は三百九十八センチの長身、これが台座の上に直立

する。全体として下から仰ぎ見るものの目を意識した造りとなっており、そのプロポーションや全体のバランスは実に見事である。

造作の技法は、岩壁面に荒彫りした後、塑土（粘土）で像の形を整え、表面に朱と生漆を塗り、さらに塑土を塗って金箔を置き、一部彩色を施したものである。造立当初は、金色燦然と輝くものであったに相違ない。残念ながら江戸時代の火災で塑土が剥落し、石心部が露出してしまっている。それでも当初の塑土が合掌する手の指先や胸の一部、腰帯にわずかばかり残り、また唇や腰あたりに彩色の跡が残っており、当時の面影をしのぶことが出来る。

こうした岩に仏像を掘り出し、その上に塑土を塗って仕上げたものを石心塑像という。大谷寺には大谷観音を含め十体の磨崖仏が彫られているが、それら全てが石心塑像である。大谷石は火山灰で出来ておりきめが

粗く、緻密な彫刻には向かない。そこで表面に塑土を塗り漆箔仕上げにした。こうした技法で作られた石仏、中国では数多く見られるがわが国では大谷寺の磨崖仏だけである。

ところで、大谷観音は、従来平安時代初期の作とされてきたが、最近の研究によると奈良時代の作といわれている。面長の顔や切れ長の眼線、左右対称にまとめた衣褶表現などが天平の作風であるという。ともあれ全体のプロポーションや複雑な造形力などから、かなり腕のある仏師の作と見受けられるともいう。

ならばこれほどの観音像を作った仏師は、いかなる者であつたらうか。奈良時代、下野国には日本三戒壇のひとつ下野薬師寺があつた。下野薬師寺の造立に、奈良の都から技術者がやってきたことは知られている。その中には最先端の技術を携えた仏師もいたことであろう。下野薬師寺跡から最近、塑土を用いた仏像が発見され、中央からやってきた

た仏師の存在が裏付けられた。その仏師こそが大谷観音を作つたのではなかつたらうか。そうでなければこれほどの見事な観音像は出来なかつたのではなかつたらうかともいう。

大谷にこれほどまでの素晴らしい観音像があることに、宇都宮市民として大いなる誇りを感じるのである。